



西岡地区 親睦アジャタ大会 2/16 札幌大学体育館

運動会の定番「玉入れ」を競技化した和寒町生まれの「アジャタ」。1チーム6人で、100個の玉をバスケットにすべて入れるまでの時間を競い合います。初企画のこの大会に、約220人が集まり、さわやかな汗を流しました。



▲チームワークが肝心、子どもからお年寄りまで楽しくプレーしました



迷惑駐車 合同パトロール



除雪作業や消火・緊急救援活動の妨げとなる迷惑駐車を無くそうと、区内各地区で町内会、警察署、区役所合同のパトロールが行われました。



▲違法駐車車両に、警告ステッカーを置いて注意を呼び掛けました（2月4日 中の島地区）



第36回「幻のゴルフ場 月寒リンクス」の巻 その2

～雪景色の中に消えたゴルフ場～

戦後の一時期に再興する動きがあったものの、一面畑となつた地に二度とゴルフ場はできま
せんでした。さらに進駐軍がホ
テルを接収した時、倶楽部に関
する資料の一切が失われ、この
ゴルフ場は一部の人のみが知る
幻のゴルフ場となりました。



▲昭和11年陸軍大演習で来道した朝香宮様との記念写真（クラブハウス前：月寒東1-20）

昭和十一年の陸軍大演習の際には、朝香宮様がゴルフを楽しんだり、東久邇宮様や李王殿下といった皇族の訪問もあったりしました。ゴルフ場の黄金時代はこのころでした。

ゴルフ場の各ホールには郷土の木や果樹の名前が付けられ、青々とした芝が一面に広がっていました。会員は百人程度で、平日の来場者は十人ほどでした。しかし、週末ともなると三十人から五十人の来場者があり、プレー後は支配人の作る洋食に舌鼓を打ったり、政治や経済談義に花を咲かせたりしました。

しかし、黄金の日々は短いものでした。戦時色が濃くなりつつあった昭和十五年ころから次第に肩身の狭いものになり、ついに昭和十八年十一月、このゴルフ場は最後の日を迎えます。

十一月下旬の雪景色の日、会員のゴルフ道具を馬車に積み、札幌グラウンドホテル岩田社長に一切を託して、月寒リンクスはその姿を消したのです。

戦後の一時期に再興する動きがあったものの、一面畑となつた地に二度とゴルフ場はできま
せんでした。さらに進駐軍がホ
テルを接収した時、倶楽部に関
する資料の一切が失われ、この
ゴルフ場は一部の人のみが知る
幻のゴルフ場となりました。

後年、演歌の作詞家、星野哲郎が、ゴルフ場のあった羊ヶ丘から月寒に至る秋の夕景色に感動して、「月寒の少年」を作り出した。作詞した昭和三十年代には、ゴルフ場をしのぶものは何もなくなくなっていましたが、無類のゴルフ愛好家でもある星野の目には、時を越えて少年キャディーの姿も見えていたに違いありません。だからこそ、星野はこの歌を遠い日への感慨を込めた歌「遠歌」と呼んでいます。

現在、跡地には閑静な住宅街が広がるのとなりましたが、このゴルフ場に勤務し、札幌初のプロゴルフファーとなった佐藤敏夫が唯一の証人としてこの地に今も住んでいます。そして、一番ホールのティーグラウンド脇に植えられたシコロの木が、廃業から六十年の時を経て巨木に成長し、ここに北海道のゴルフの原点となった名門ゴルフ場が、間違いなく実在したことを知らせる証しの木として今も健在です。